



時事評論家 増田俊男

「習近平が皇帝になる中国を知らずして日本のことは語れない」。 (「小冊子」Vol.125 第4章の副題)

習近平は、中華人民共和国を建国した毛沢東を「たん起来」、改革開放で経済成長を達成した鄧小平を「富起来」、そして習近平自身を「強起来」とし「新時代の中国の特色ある社会主義思想」を実現すると述べた。

5年毎に開かれる第19回中国共産党全国代表大会(党大会)(2017年)で、習近平は「二つの100周年の成功」(2021年の共産党設立、2049年の建国)を宣言し、中間の2035年を目途に中国は経済力、軍事力、科学技術力、物質・精神文化面において世界一流になり、2049年にはあらゆる面で世界のトップに立つという理想又は野心を掲げた。

2018年3月、憲法で決められていた2期10年の国家主席任期規定を撤廃したので習近平は死ぬまで国家主席になれることになった。

本年2022年第20回党大会での習近平第三期承認は確実なので、いよいよ中国に秦の始皇帝(紀元前259年-210年)以来の皇帝が誕生する。

鄧小平には国家主席の肩書は無かったが、事実上生涯中国のトップであったが、習近平は生涯名実ともに中国のトップになる。

中国歴代の国家主席は鄧小平の「能ある鷹は爪を隠す」と「集団指導体制」に従ってきたが、習近平になって戦略は一変、「強起来」の名の如く、前任者は「選択的攻撃論」(強い者にはおべっかを使い、弱い者には強硬に攻める)であったが「全方位的強硬路線」に変わった。今まで猫をかぶってきた強者アメリカに対して一対一の戦いも辞さない構えである。

集団指導体制は習近平皇帝個人崇拜と独裁体制に変わる。

中国は経済面ではドルの縄張り(市場)を奪い、人民元の市場拡大の為の「一対一路」を推進、軍事面では南シナ海、東シナ海等の軍事基地化でアメリカの制海権に挑戦している。

アメリカは中国の攻勢に対してクワッド(アメリカ、オーストラリア、日本、インド)やオーカス(アメリカ、イギリス、オーストラリア)で対抗しているが、アメリカは最早単独で中国に対抗出来なくなっている。

「寄らば大樹の陰」で戦後世界はアメリカの政治・経済覇権下に身を寄せたが、大樹の葉が落ち始めるのを目にした今、一体何時までアメリカの陰に留まれるだろうか。

日本も他人事ではなはない！

「小冊子」Vol.125の第4章を熟読して頂きたい。

増田俊男の「ここ一番！」大好評配信中！

投資にビジネスに一番役に立つ「ここ一番」。

「明日では遅過ぎるナウな情報」をその場で必ずお送りします。

現在、増田俊男の「ここ一番！」をFAX又はe-mailにて配信しております。

詳しいご案内、お申込みについてはマスダ U.S.リサーチジャパン(株)Tel: 03-3956-8888、

HP: www.chokugen.com まで。

「時事直言」の文章及び文中記事の引用をご希望の方は、
事前にマスダ U.S.リサーチジャパン株式会社 (FAX: 03-3956-1313) までお知らせ下さい。